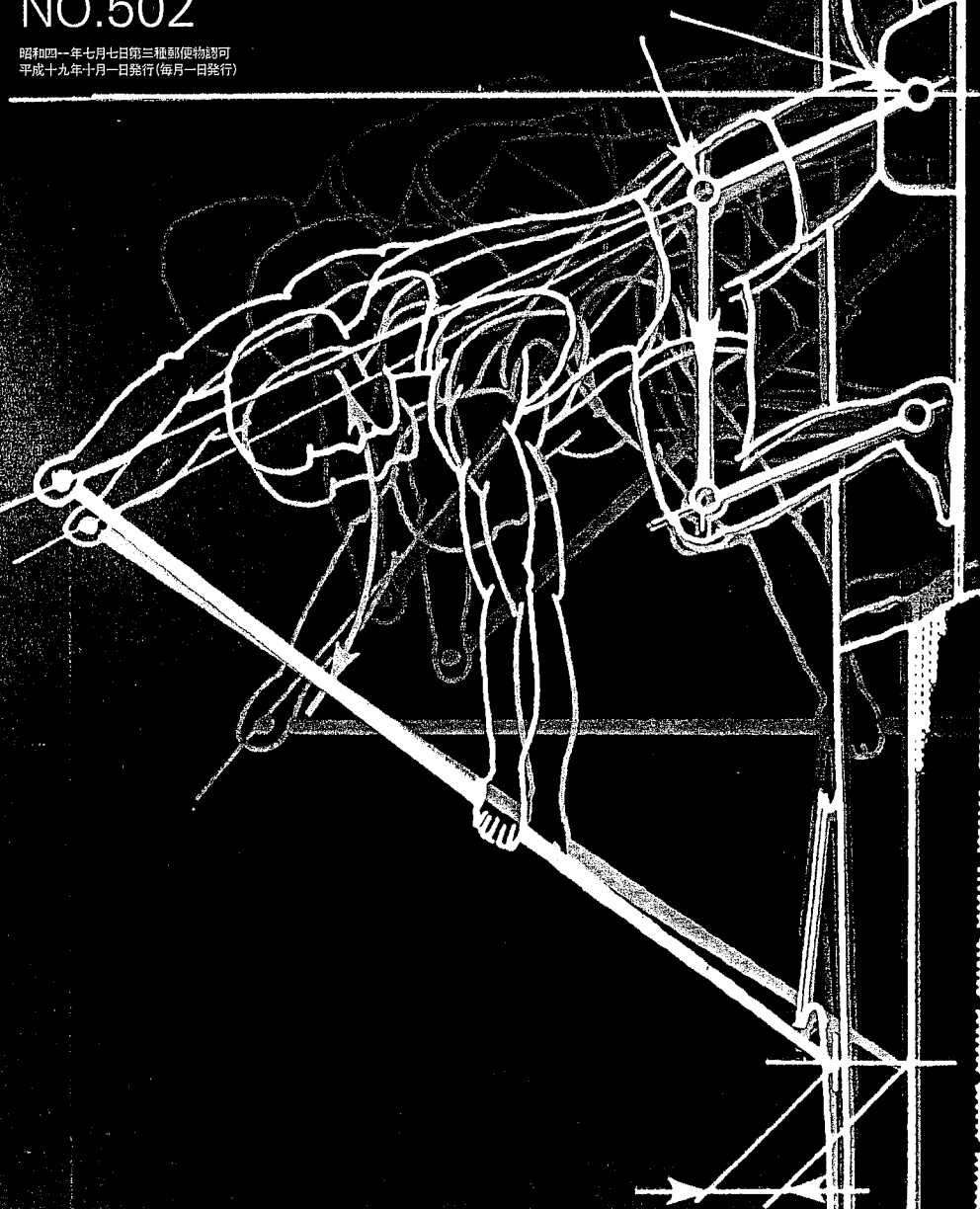


創文

2007.10
NO.502

昭和四一年七月七日第三種郵便物認可
平成十九年十一月一日発行(毎月一日発行)



創文 2007.10 | 502

http://www.sobunsha.co.jp ISSN1343-6147 ▶ 最近の刊行書 ◀ (価格表示は本体価格)

3月	1-2月	12月	11月
<p>大名権力の法と裁判 <small>審法研究会編</small></p> <p>8000</p>	<p>戦争放棄の思想についてなど <small>広中俊雄</small></p> <p>2800</p>	<p>宋詞研究 南宋篇 <small>村上哲見</small></p> <p>5200</p>	<p>宋代司法制度研究 <small>梅原 郁</small></p> <p>15000</p>
<p>心の形而上学 <small>冲永宣司</small></p> <p>9500</p>	<p>独仏関係と戦後ヨーロッパ国際秩序 <small>川嶋周一</small></p> <p>6500</p>	<p>法法の生成と民法の体系 <small>林信夫・佐藤岩夫編</small></p> <p>19000</p>	<p>清朝考証学の群像 <small>吉田 純</small></p> <p>7500</p>
<p>仙台藩 下 <small>審法史料叢書刊行会編(審法史料叢書 5)</small></p> <p>18000</p>	<p>神学大全 45 <small>トマス・アケイナス 稲垣良典訳</small></p> <p>5000</p>	<p>清朝考証学の群像 <small>村上哲見</small></p> <p>7500</p>	<p>神学大全 45 <small>トマス・アケイナス 稲垣良典訳</small></p> <p>5000</p>
<p>物権法講義 五訂版 <small>鈴木禄弥</small></p> <p>4500</p>	<p>同時代史論 <small>宮田光雄(宮田光雄思想史論集7)</small></p> <p>8000</p>	<p>憲法 第三版 <small>樋口陽一</small></p> <p>2800</p>	<p>コード・シヴィルの200年 <small>石井三記編</small></p> <p>5000</p>
<p>近世都市社会の「訴訟」と行政 <small>坂本忠久</small></p> <p>6000</p>	<p>日朝交易と対馬藩 <small>田代和生</small></p> <p>7800</p>	<p>神学大全 32 <small>トマス・アケイナス 稲垣良典訳</small></p> <p>4300</p>	<p>東アジアにおける鉄鋼産業の構造変化 <small>利博友・ラムステッター・モウシュク編</small></p> <p>4500</p>
<p>西洋的思考における「二チエの形而上学的な根本の立場」 <small>ハイデッガー全集44 菊地恵善訳</small></p> <p>5000</p>	<p>法制史研究会編 <small>樋口陽一</small></p> <p>10000</p>	<p>法制史研究会編 <small>樋口陽一</small></p> <p>10000</p>	<p>法制史研究会編 <small>樋口陽一</small></p> <p>10000</p>

イタリアのアカデミー

根占 献一

(1) シエナの古き文学アカデミー

稀書を購入する動機として、学術研究の基本書蒐集という当然の行為があるであろう。これは、一種の「源泉に帰れ」との、ルネサンスの標語の生きた実践である。インターネット時代に入り、ルネサンス時代の印刷書誌情報も日々身近になり、また研究書も労を厭わなければ、ほぼ取得できるようになった。

だが、古書を求める理由はこれにとどまるものではない。そこには収集家の楽しみも亦ある。以前の所有者が学問上すでに知己である場合は、持ち主との精神的連帯は一層強化され、格別なものとなる。フロリンダ・チェッレタータ (Florinda Cerretta) 著『アレックスandro・ビッコロミニ。一六世紀シエナの文学者として哲学者』(Alessandro Piccolomini. Letterato e filosofo senese del Cinquecento,

Stena, 1960) はそのような入手書の一冊で、ステイルマン・ドレイク (Stilman Drake) の蔵書票が付いていた。それは所謂インプレス (Impresa) 紋章つき格言の図案となっている。現代におけるガリレオ・ガリレイ研究者として、ドレイクには多数の著訳書がある。アレックスandro・ビッコロミニ (一五〇八―七八) は当代の優れた古典学者として名が通り、彼に関する近年の定評ある書がチェッレタータのこれである。

アレックスandroはまた詩人にして散文作家でもあった。「ラ・ラファエッラ。女性の美しき作法をめぐる対話」(La Raffaella. Dialogo de la bella creanza de la donna) は彼の数ある著書の一冊であり、一五三九年にヴェネツィアで初版が出た。このあと、この地のみならず他都市でも再版されるほどの人気書となり、類似本や翻訳書が現われる。なお、彼の属するビッコロミニ一門は、教皇を

複数出した、都市国家シエナの閥族である。同家のもっとも著名な人物といえば、エネア・シルヴィオ・ピッコロミニ¹⁾の曾のピウス二世 (在位一四五八―六四) であろう。パトランソ大司教となるアレックスandroもこのローマ教皇と同様、粹な文化人であった。

今回は愛書家よろしく、蔵書票などに蒞書を傾けるために筆を執ったわけではない。自らの体験を交えながら、イタリアの「アカデミー」について考えてみたいのである。チェッレタータの先の書は、実はシエナのリ・イントロナーティ・アカデミー (Accademia senese degli Intronati) ―一五三五年設立の著名な協会 刊行書の一点で、これを知ったのは購入後であった。古書目録にドレイクの蔵書票付きとはあったが、そのような刊行物の一書とは記してなかった。アレックスandroは会の有力な一員であったから、同会との関係を教える書物であろうと期待はしたが、まさかその出版物とは思ってもいなかった。

アカデミー会員には綽名が付いている場合が多かった。彼は「わからず屋の粗忽者 (ロ・ストオルディート・イントロナーテ) (lo stordito intronato)」という筆名を有していた。リ・イントロナーティ (リントロナーティ)・アカデミーの「イントロナーティ」とは「わからず屋たち」の意である。一六世紀にはそのような類のアカデミーが多数、各地に出現した。ミケーレ・マイレンデル (Michele

chele Maylender) はその『イタリア・アカデミーの歴史』(Storia delle accademie d'Italia, Bologna, 1926-1930, 5 voll. 一九七六年 出版社 [orni 復刻]) で、数々の近代アカデミーを一八世紀まで調べ上げている。多くは短命であるが、その数は二二〇〇に上る。文化的事柄のイタリア起源は珍しい話でなく、アカデミーの始まりも同国にあることなる。

(2) フィレンツェの現代アカデミー

この始原は、しばしばマルシリオ・フィチーノ (一四三三―九九) の「プラトン・アカデミー」に求められる。同アカデミーの活動状態には疑義を挟む向きもあるが、綽名を付ける習慣はなかった。「第二のプラトン」とのフィチーノの世評だけで充分であろう。彼とその身边に関しては、『フィレンツェ共和国のヒューマニスト ―イタリア・ルネサンス研究』(創文社、二〇〇五年) と『共和国のプラトンの世界 ―イタリア・ルネサンス研究 続』(同社、同年) の両著で言及した。公刊後、幸いにイタリアの現代アカデミーと出会い、元来関心を持っていた同国のその実態を知る手がかりを得た。

昨年 (二〇〇六年) 春、五年ぶりにフィレンツェに行くことになったため、早速、親友のクラウディオ・ボルゲーシ (Claudio Bor-

phasi) 博士に手紙を書いた。すると、アカデミーで講演して欲しいと電話がかかってきた。ここで半時間ほど私の研究話を話し、そのあと会員の質疑事項に答えてほしいというのであった。長い付き合いのなかで、アカデミーのことはそれまで聞いたためしかなかった。若手の詩人には文学賞などを出し、後援しているという。アカデミーの名は「イル・ファウノ」(Il Fauno)、訳せば「牧神」会であり、「ジッヴォヴァンニ・ブルチディアーコノ文化協会」(Associazione culturale "Giovanni Arcidiacono")となっている。

講演は四月四日午後八時半から、フィレンツェ市内パリオンチーノ通りのレストラン、コロ・レッツォーネで開かれた。この通りはおそらくこれまで歩いたことはなく、このような細い路地に店があるとは、地元の人以外はなかなかわからないのではなからうか。今は便利なインターネット時代であるから、本務校の英語版大学案内が印刷され、出席者二五人ほどに配布されていた。折りしも、時期も時期、戸山の桜並木の満開の写真が美しかった。また、拙著『ロレンツォ・デ・メディチ』(南窓社、一九九九年第二版)が第二〇回マルコ・ポーロ賞をもびつていたので、英字新聞に写真付きで出た記事も役に立った。さらに、簡単なながら、先の両著につけたイタリア語による目次なども効果的であった。イル・ファウノのホームページには、「例外な会合」(TORNATA STRAORDINARIA)と私

(3) アカデミーとコンパニア

講演冒頭で、私はフィチーノのプラトン・アカデミーに学究的関心があり、ひとりで初めてフィレンツェを訪問した時、真っ先にサント・マリア・デル・フィオーレ大聖堂内のフィチーノ半身像を見にでかけた。思い出を語った。それ故同じくアカデミーの名を持つ、皆様のイル・ファウノで話ができることはこの上なく光栄である」と心情を吐露した。また、このアカデミーという名の起原がアテネ郊外の地アカデメイアにあり、フィチーノ自身が古代ギリシアのアカデミーの再興を期していたとしても、その実態は当代の俗人中心の宗教組織、コンパニア(信心会)に類似性が見られることも力説した。そこには堅苦しい上下の身分関係もなく、今晚のこのような人的結合から成り立っていたと説明した。フィチーノのアカデミーは後世のそれと違って規約もなく、開催場所も一定ではなかった。それはイル・ファウノにもいえ、時には郊外のレストラン、ラ・チェルトーザなどでも開かれている。

大聖堂参事会員だった彼の名はよく知られ、そのアカデミー観は異とするに足りなかった。邦人講演ゆえに日本関連の質問が多かった。意外だったのは、日本は古来変わらず、伝統を守り続けていると言われたことであった。それに対し、私は昔から外国の影響を受

の講演案内が残っている。これは「格別の帰省」の意味にも取れるのではない。久々にこの地に戻った者には、そう理解したくなる通知であった。私のことは「イタリア・ルネサンスの人文学者(ウマニスタ)・歴史家」と紹介があり、なんだか面映ゆい。特に、隣に座った、フィレンツェ大学のマッシモ・ハービ(Massimo Papi)のような中世史家の前ではなおさらである。彼等の封建制が話題になった時には、朝河貫一の『入来文書』を説明し、私見を述べた。なお、私をジッヴォヴァンニ・ブルノーの邦語版監修者というのは、古い記事に基づく案内であり、正確でない。かれこれ一〇年ほど前に、ブルノー国際研究会開催に合わせて、私はイタリア国営ラジオでブルノーの邦訳の歴史を語ったことがあった。その頃は私も加藤守通教授の驥尾に付して、一作品を翻訳することになっていた。時の流れは早く、あの時来日したジッヴォヴァンニ・アクイレッキア(Giovanni Aquilecchia)は鬼籍に入った。アクイレッキアによる「ピエトロ・アレティーノ」やブルノーの俗語作品校訂は信を得ている。今は手元に彼を追悼する論文集(*Studi sul Rinascimento italiano. In memoria di Giovanni Aquilecchia, a cura di A. Romano e P. Procaccioli, Manziana, 2005.*)があり、来日の折りよりも若い時の、だが同様に禿頭の彼を伝える写真が一葉、取められている。

け続けていると例を挙げて説得した。これには首肯者も少なくなかった。デザートに出たカントッチーニはヴィン・サントに漬けて食しても固い歯ごたえが残ったが、この頃にはすっかり和氣藹々たる雰囲気、食卓仲間、コンパニニョとの別れが名残惜しくなっていた。なかには創文社刊の小著を送ってほしいと頼む会員もいた。帰国後サイトを覗くと、「サヴォナローラ時代の共和国フィレンツェの直接税」を始め、過去の数々の専門的な講演題目が挙げられている。それに引き換え、思い出すと、まさに汗顔の至り、といったところである。

だが、この体験は、私にアカデミーの本質を一段と強く感じさせてはおかない。プラトン・アカデミーという名称自体は一六三八年という、たいへん遅い時期に漸く現われる。設立の機運を高めたとされるフィレンツェ公会議からは、二〇〇年ものちのことになる。アカデミーの多様な意味合いや、これに特に哲学者プラトンの名を冠する意義などは、注意深く史料から考察する必要がある。その際、小著で詳述し、また講演でも指摘したように、コンパニアという組織とその活動が有力な手がかりを与えよう。

マイルンデルも先述の労作で、その範例を求めて親しい友のつながりや信心組織を示唆している。具体的にそのことを教えるのは、ニコラウス・ペヴスナー(Nikolaus Pevsner)の『美術アカデミー

【今昔】(Academies of Art, Past and Present, Cambridge, 1940)である。最初にアカデミー一般の序論をなす章があり、ついで、ギルドという職業組織、コンバニニアという信仰・宗教団体から、(美術)アカデミーがいかにか自立していくか、事実を指摘する章が来る。最近では長年の研究成果が一本となった、一六世紀公国時代のフィレンツェ政治文化の研究者ミシェル・ブレザンス(Michel Pansaer)の論集(L'Académie et le prince. Culture et politique à Florence au temps de Cosme I^{er} et de François de Médicis, Manziana, 2004)が、序論では、真に先基盤としてのコンバニニアに触れている。各論では、公的な「フィレンツェ・アカデミー」(L'Accademia Fiorentina)を軸に、会員同士の絆あるいは非会員との交流、また他の私的アカデミーとの関連や相違を明らかにしている。関秀詩人ヴィットーリア・コロンナ(一四九〇—一五四七)を扱う章は時代動向上、特に興味深い。

コンバニニアをいかに理解して和語にするかが、鍵とも問題ともなろうが、フィチーノの仲間達がこれから独立したという史料はない。所属していたコンバニニアから離脱した例が見られるのは、彼以後のアカデミーに限られている。トスカーナ(大)公国時代のアカデミーはフィチーノのサークルとは趣を異にし、権力者メデイチ(大)公との関係が深く、公的アカデミーと呼ばれるに相応しい。

ギールケ政治思想の再評価

オットー・フリードリヒ・フォン・ギールケ(一八四一—一九二一)は、ドイツを代表する団体思想を構築した団体法学者としてあまりにも有名であるが、その高い名声にも拘わらず、ギールケの政治思想は本格的な研究対象とはされてこなかった。そもそも従来ドイツ政治思想史研究においては、三月革命期とワイマル共和国初期という研究の蓄積がきわめて豊富な研究領域に比して、ギールケが活躍した第二帝政期、とりわけビスマルク期(一八七一一九〇)の穩健的自由主義思想については研究の蓄積が稀薄である。その原因としては、主に以下の二つの理由が考えられる。第一に、法実証主義という当時の学問の傾向のもとドイツ国法学から派生したこれら政治思想とのとり組みには公法学の知見が必要となるため、政治学からは敬遠されがちであったこと、第二に、「三月革命期に花開いた数々の自由主義思想が『革命の失敗』と『上からの統一』の前に撤退を余儀なくされ、その後ワイマル期に不十分な形で再び盛り上がるものの、最終的にナチス第三帝国の破壊へ至る」という大

ただ、時間がいかに経過しようとも、この国の地域アカデミーにはコンバニニアの雰囲気が残存してはいまいか。「伝統」と言っても良い。それは、アカデミーを学士院や芸術院と訳して崇めたり、洋菓子や美容等の学校名にこれを無造作に用いたりするお国柄では理解し難い事柄に属しよう。同時代の歴史を顧みると、来日した南蛮人のなかには茶道などの集いに本国アカデミーの働きとの近似性を覚えている者もいたから、むしろ旧日本のほうに真のアカデミーが存在していたのかも知れない。

今春も、イル・ファウノ会長ランベルト・リッリ(Lamberto Rilli)夫妻らと食事をして、親交を深めることができた。それは、「復活祭おめでとう」(Buona Pasqua)という別れの挨拶が交わされる時期の、フィレンツェ近郊フィエゾレでの穏やかな夜のひと時のなかであった。

(おじめ・けんいち 学習院女子大学国際文化交流学部教授)

ルネサンス思想・文化史)

フィレンツェ共和国のヒューマニスト

根占 一 イタリア・ルネサンス研究 レトリックと自由の意義が歴史的に探究され、公私にわたる市民的ヒューマニストたちの活動を描く。 A5・三〇四頁・六五〇円

共和国のプラトンの世界

根占 一 イタリア・ルネサンス研究 純ファイチーノの書簡からルネサンスを読み解き、リッチーニの中に共和政治的自由の喪失を嘆く声を聴く。 A5・三〇四頁・五三〇円

遠藤 泰弘

枠の中で、第二帝政期の政治思想が魅力的な研究対象とならなかつたことである。さらに、とりわけ政治学と国法学の境界線上にあるギールケの国家論は、「法ドグマティクとは異質である」という理由からドイツ公法学からも敬遠され、ドイツ本国においても本格的な研究がなされてこなかった。

しかしながら、近年ドイツ政治史の分野では、第二帝政期を消極的に評価する従来の解釈枠組みをめぐり、ヴィルヘルム期(一八九〇—一九一八)を中心に当時の実情に即した政治過程の解明がなされ、脱イデオロギー化が進展している。また近年、ドイツ公法史の分野においても、ビスマルク期における法実証主義の支配力を一元的に強調することに疑問が呈され、「法実証主義に反対し、当時の政治構想の弱点を鋭く衝いた、一九世紀後期のギールケ有機的国家論の影響力を正当に評価し直すべき」とする有力な指摘がなされている(M・シントライス『ドイツ公法史』第二巻(一九九二)。むしろ、ドイツ公法史における研究対象は、未だパウル・ラーバント